二人の世界（仮）

さばの味噌煮缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の世界（仮）

【Ｎコード】
Ｎ６５９１Ｚ

【作者名】
さばの味噌煮缶

【あらすじ】
むしゃくしゃしてやった。今は後悔している。
誰でも良かった。いや、コイツ以外なら誰だって良かったのに。
人気のないゴミ捨て場で男を刺した。そして逃げた。死んだと思っていたその男は生きていて、何故かそいつに監禁されてしまった。
被害者（電波）と加害者の歪な恋愛。いや恋愛じゃないかもしれない。残念がフィーバーしている。

最初

桐島（きりしま）　加野（かや）
自分を刺した相手に惚れて、その相手を監禁しちゃったやばい人。

理子（あやこ）
加野を刺してしまったばっかりに惚れられてしまった人。加害者から被害者になっちゃった。可哀想な子。

あらすじ
　むしゃくしゃしてやった。今は後悔している。
　誰でも良かった。いや、コイツ以外なら誰だって良かったのに。
　人気のないゴミ捨て場で男を刺した。そして逃げた。死んだと思っていたその男は生きていて、何故かそいつに監禁されてしまった。
被害者（電波）と加害者の歪な恋愛。

殺人（むしゃくしゃしてやった）

特に理由なんてなかった。
――むしゃくしゃしてやった、今は反省している――
少し前に流行った決まり文句。
動機なんて無くて、ただ、自分の為の逃避。自分の置かれた環境から逃げ出す為に行った非日常的行為。
それで何かが変わるなんて思っていなかったけれど、その瞬間だけは、確かに何かが変わっていたのだ。
瞬間的な非日常に酔いしれて、そしてすぐ背後に迫ってきた恐怖と罪悪感に追われるように、また逃げ出した。

その日、私は人を殺した。

受験勉強に飽き飽きしていた。まだ十五才なのに、将来の話ばかりする両親が嫌いだった。呑気に小学校に通う弟妹達が嫌いだった。長女だから、お姉ちゃんだからと言う親戚連中が嫌いだった。
ご両親が立派だからと言う近所の人たちが嫌いだった。
とにかく嫌いなモノばかりに囲まれて、私はそこから逃げ出したかった。逃げ出さなければ、押し潰されて死んでしまうと思った。
死にたくないと思った。
気がつけば私は家を飛び出していた。時間は深夜零時。鞄などは持っていない。ただ、ハンカチで巻いた包丁を一つだけ持って、走った。
人気のない町を、更に人気のない通りを選んで走る。
裏通りの複雑に入り組んだ道を走って、家から三キロ程離れたゴミ捨て場の前で、人影を見つけた。
まだ少し距離がある。
目を凝らして、人影を注視する。

相手は私に気づいていない。
今しかないと思った。
私は包丁を両手で握りしめて、人影めがけて走り出した。
どんっとぶつかる衝撃、それに次いで包丁の刃が肉に食い込む感触。そして滲み出た血が包丁を伝って私の両手を濡らす感覚。
人影が倒れ、私は立ち尽くしたまま倒れたその人を見下ろしていた。
死んだのだろうか。
そう考えて、唐突にやって来た恐怖と罪悪感。
私は人を殺したのだ。
何もかもが怖くなって、私は逃げた。ハンカチも包丁も刺した人もそのままにして、私は走った。
今はただ、家に帰りたかった。
あれ程嫌いなモノで溢れていた家に、帰りたくて仕方がなかった。

既視感（ストーカーがいる）

あの夜から、私は常に何かから逃げるように生活している。
あの夜の事は、事件になっていなかった。
新聞を見ても、ニュースを見ても、何もなかった。
ただ、以前と変わらない日常の中で、私だけが変わってしまった。
何かに怯え、隠れ、逃げるように生活している。
学校以外で家を出る事もなく、風呂とトイレ以外で部屋を出る事もない生活。窮屈ではあったが、部屋で布団に潜り込んでいる間だけは、恐怖と罪悪感から逃げる事が出来た。
そうして二週間がたち、私は徐々に活動範囲を広げていった。
二週間、何の変化もなかった事にすっかり安心してしまっていたのだ。
学校帰りにファーストフード店に寄ったり、休日に買い物に出かけたりした。
そうしてすっかり以前の生活を取り戻した筈だった。
なのに。
あの夜から二週間と二日。私は視線に悩まされていた。
街を歩けば必ず感じる視線。もしかしたら、あの夜の事を知っている誰かかもしれない。そう考えると、また恐怖が戻ってきた。
私は再び部屋に籠もるようになった。
学校へ行くのも怖くなって、もう三日も仮病で休んでいる。
外へ出るのが怖い。
視線が怖い。
何もかもが私を責め立てる錯覚。
とにかく、一人になりたかった。
三週間と三日目の深夜零時。人気のない町を、人気のない通りを走る。何も持たず、裸足のままで走る。
複雑に入り組んだ裏通りを抜けると、人通りのない橋に出る。

何もかもから逃げ出したくて、私は走った。
走って、走って、走って。
そして裏通りを抜けると、そのまま減速せずに欄干を飛び越える。
目を閉じて、束の間の浮遊感。
そして暗転。

捕獲（捕まえちゃった）

深夜。ゴミ袋を両手に裏通りのゴミ捨て場に向かった。
日中はそれなりに人のいる裏通りも、日が沈み、深夜となると人の気配は全くない。
ゴミ捨て場にゴミ袋を投げ込んで、後は家に帰るだけだった。
何の変哲もない日常。ただ繰り返されるだけのそれに飽き飽きしていた。
家は裕福で、今は一人暮らしだが金に困った事もなく、恵まれた生活をしている。
それでも代わり映えしない日々に退屈を覚え、日常を変える非日常を望みつつ、何もしない日々が続く。
そんな中、非日常は唐突に腕の中に飛び込んできた。
ゴミ捨て場からの帰り、不意に聞こえた足音は徐々に近づいてくる。
そして真後ろに来たと思った途端、背中に走る痛み。
刺されたのだと思う。
バランスを崩して倒れ込む。
加害者は暫く立ち尽くしていたが、すぐに来た道を戻って逃げてしまった。
少女だった。
少女が去ってから、背中に刺さった包丁を抜いた。少しばかり血が飛んでしまったが、問題はないだろう。少女が去った方向を見てみると、白いハンカチが落ちていた。包丁を包んでいたのだろう、そのハンカチには、隅の方に「理子」と刺繍されていた。
あやこ、と読むのだろうか。それともりこだろうか。
降って湧いた非日常が、欲しい。
ハンカチと包丁を持って、家に帰った。

あの夜から数日たったある日、目的もなく歩いていた町中で、あの少女を見つけた。
運命だと思った。
その日から、ずっと少女を見ていた。
少女の生活は規則正しい。いつも時間通りに家を出て学校に向かい、時間通りに学校を出て帰宅する。
帰宅ついでに寄り道が増えれば、少女を見ていられる時間が増えた。
家も学校も知っている。
二週間程たつと、少女が視線に気づいたようだった。
それから数日たつと、時折少女と目が合うようになった。
三週目には、少女とはっきり目が合った。
そして三週間と三日目、深夜再びゴミ捨て場で少女と出会った。
少女はこちらに気づきもせずに裏通りを走り抜け、減速せず橋の欄干を飛び越えた。
自殺だろうか。
あの橋の高さでは痛いだけで死ぬ事は出来そうもないのに。
少女が飛び降りたのを見届けて、裏通りを歩く。
橋の下に降りると、川に飛び込んだ。
流れの緩やかな川だから、そう遠くには行っていない。
川を泳いで、少女を捜す。
あれは運命の人なのだから、必ず見つかると思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6591z/

二人の世界（仮）

2011年12月30日16時45分発行